

世界には、「歴史が形作られる瞬間」というものが、確実に存在する。

例えば、国が生まれる時。

例えば、国が滅ぶ時。

例えば、英雄が戦果を上げる時。

例えば、英雄が死ぬ時。

「歴史」とは、それらの「瞬間」が積み重なって、そうして形作られてゆくものである  
その事に、疑問を差し挟む余地はない。

そして、今、この瞬間も

第35回エンドール国王杯武闘大会、準決勝第2試合の勝敗が決しようとするこの瞬間  
も、また「歴史が形作られる瞬間」であったに違いない。

なぜならば、この試合こそ、後に考えれば、この大会の事実上の決勝戦であり

そして、この試合に勝ち、優勝した格闘家は、まだわずか17歳の少女、しかも、ある  
王国の王女であったのだから。

\*

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第  
一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

---

熱血格闘系・ドラクエ4二次創作小説

## 「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第2章より～

「プロローグ」

あさづけ兄貴

---

ドゴオオッ！

鈍い音と共に、二人の動きが止まった。

＊

エンドール王城の裏手に建つ、王立闘技場。

今まさに、この闘技場で、二十数年ぶりに復活した、かつてのエンドールの名物 国  
王杯武闘大会が開催されていた。

試合は、準決勝第2試合。

既に第1試合は終了し、デスピサロと名乗る若者が、圧倒的な強さで、決勝に駒を進め  
ている。

その対戦相手を決める、もう1試合の準決勝が、今まさに、行われていたのだった。

水を打ったように静まった観客席。

咳払いひとつ、聞こえない。

観客の遙か眼下では、二人の格闘家が、お互いに重なるように密着しながら、動きを止  
めていた。

動く素振りはない。

＊

それにしても

異様な二人であった。

片方は、大男であった。

いや、「大男」と呼んでよいものか。

彼は、腰だけは布で覆っていたが、それ以外の部分は露出させていた。そして、その  
露出している部分が、びっしりと白く長い毛で被われていたのである。

もはや人間とは思えぬ、まるで化物<sup>モンスター</sup>のような出で立ちである。

と言うよりも、例えるなら、もともとの体格が、それともその毛が長くてそう感じるの  
か まるまるとした、そう、ちょうど雪だるまのような男であった、というのが最も適  
切かも知れぬ。

彼の左の二の腕が、途中から、異常な方向に折れ曲がり、腫れ上がっていた。

骨折しているのであろう。

そして、もう片方の右腕　その拳が、相手の腹部にめり込んでいた。

その、相手。これもまた、異様な人物であった。

女性だったのだ。

いや、女性であっただけではない。年齢も若かった。

彼女は、十代半ばの少女だったのである。

栗色の、柔らかくカールのかかったロングヘアを、細いリボンでひとまとめにしている。  
黄色い袖なしのワンピース。スカートは膝上。一件何でもないように見えるが、動きやす  
いよう、工夫を凝らされた格好である。

女性らしい曲線を残しながらもほどよく引き締まった、カモシカのような脚線を、黒の  
ストッキングと<sup>オレンジ</sup>色のブーツが隠していた。

相手に重なり、顔はよく見えない。

彼女の左腕。決してごつごつしておらず、かといって肉が付き過ぎた感じもしない、む  
しろほっそりとした左腕。

その左腕が、やはり、折れていた。

大男と全く同じ場所だった。

二の腕がへ<sup>へ</sup>の字に曲がり、その部分で赤く腫れているのが分かった。

そして、もう片方の右拳もまた、相手の大男の腹部にめり込んでいたのだった。

＊

恐らくは、相打ちになったのであろう。

互いの拳を互いの腹部にめり込ませたまま、しばらく動かなかった二人

その均衡を先に破ったのは、少女の方だった。

彼女の上半身ががくんと沈み、片膝をつく。

「！」

一瞬、観客席を、声にならない戦慄が駆け抜ける！

「姫様！」

「姫様アーツ!!」

二人の男の怒号が飛ぶ。

少女の付き人なのだろうか、ひとは若い男、一人は年老いた男の声だった。

「姫様」と呼ばれた少女は、片膝をついたままの姿勢で、しかし、上目づかいに相手の男を見上げ　何か、言ったようだった。

「　　　　　」

何を言ったのかは、分からなかった。

ただ、その時、彼女を近くで見る事ができた者がいたなら、その者は気がついていただろう。

彼女の眼光が、全く衰えていなかった事に　　。

彼女の言葉に答え、白い毛むくじらの大男も、何か言ったようだった。

これも、彼女の言葉と同様に、全く聞き取れなかったが　　、ただ、その唇は、こう動いていたように思われた。

俺の、負けだ

その直後、大男は

「がはあっ!!」

叫び声と共に、口から大量の血を吐いた！

彼の口腔からほとばしる血の赤が、胸の白毛を、その色に染めて行く。

そして、そのまま

時間の進みに取り残されたかのように、彼はゆっくりと、真横に倒れていき

ズズウン！

闘技場を揺るがす轟音と共に、彼は地に伏した。

＊

男は起き上がらない。

少女もまた、片膝をついたままの姿勢であった。

ざわめき始める観衆。

その時

「アリーナ姫様！」

そう叫び、闘技場グラウンドの中央にしつらえられた土盛りの戦闘台に、走り寄る姿があった。

レースのドレスを両手でたくし上げ、よたよたと走るその姿は、このエンドールの国民であれば誰でも見知った少女のものであった。

エンドール現王の一人娘、モニカ・ド・エンドール王女である。

戦っている少女の身を案じ、駆け寄ろうとしたモニカ王女であったが

「来ないでっ！」

戦闘台上から、少女の良く通る声が、それを制した。

「でも」

涙を浮かべ、食い下がるモニカ王女に、彼女は優しく、

「大丈夫、一人で立てるわ そうしなきゃ、約束、守れないから」

そう言って、微笑んでみせた。

近くで見ているモニカ王女には、分かっただろう。

戦闘台上の少女は、大怪我を負っていた。

左腕は折れ、頬は腫れ上がっている。

額や唇の端からは、赤い血が流れている。

服も、ところどころボロボロに破れていた。

それを見るだけでも、彼女のダメージが相当深いものである事が容易に見てとれる。にもかかわらず、彼女は、モニカ王女に「来るな」と言ったのだ。

この試合には、闘っている者以外が、選手を手助けするために戦闘台に入った場合、その選手の反則負けになる、というルールがあったからである。

そう。彼女は、勝つつもりだったのだ。

「姫様のおっしゃる通りです」

彼女は、背後に、若い男の声を聞いた。  
振り向くと、そこには、二人の男が立っていた。

青年と老人。

青年は、緑色の神官服に身を包み、これも独特の、丈の高い帽子をかぶっていた。  
柔和な顔つきの、涼やかな美青年だった。  
帽子の中央に、「調和」を表す丸と「神の恵み」を表す黄色い十字を組み合わせた紋章。  
エンドールの隣国、サントハイム聖王国の紋章である。

老人は、青年の神官服と同じ色 緑色のローブ長衣に身を包んでいた。  
禿げ上がった額に深く刻まれた皺、白い髭。そして鋭い眼光。  
革のベルトのバックルには、やはり、サントハイム聖王国の紋章があった。

「クリフト様     ブライ様     」

モニカは、自らクリフトとブライと呼んだ二人の男と何やら少し話をした後、青年  
こちらが「クリフト」であるようだった     の差し出したハンカチで涙を拭き、戦闘台  
の方を向き直った。

そして、ちょうどその時、戦闘台上の少女が、ゆっくりと動きだした。

「まったく、うちの男どもは     少しは心配しなさいよね     」  
彼女はそう呟くと、少しずつ上体を起こし     膝に力を入れた。  
腰が浮き、ゆっくりと、頭が上がる。

「     ! 」

モニカの顔が、ぱっと晴れた。  
後ろの男たち     クリフトと呼ばれた青年も、ブライと呼ばれた老人も、微笑みを浮か  
べ、戦闘台を見つめていた。

ゆっくりと     ゆっくりと。  
膝が     腰が     背中が  
少女の体は、少しずつ、立ち上がっていった。

観客席のざわめきが、徐々に大きくなっていく。

彼らの見ている前で、少女は  
背筋を曲げた姿ながら、今やしっかりと、二本の足で立ち、<sup>リ</sup><sup>ン</sup><sup>グ</sup>戦闘台を踏みしめている。

ざわめきはいよいよ、歓声となる。

彼ら観客の前で、ついには、彼女は、背筋を伸ばし、胸を張る。  
右の拳を、腰の位置でぐっと握る。

雄々しくもりりしい、仁王立ち。

モニカ王女は、両手を胸の前で組み、目を潤ませて、<sup>リ</sup><sup>ン</sup><sup>グ</sup>戦闘台上を見つめていた。  
そして、ブライとクリフトの言葉に、幾度となく頷いていた。

彼女の視線の先には、仁王立ちの少女の姿があった。

傷つきながらも、最後まで闘い抜いた少女。

モニカ王女との約束を守り通した少女。

いまや、王女のかげがえのない親友である存在。

モニカ王女の胸に、万感の想いが去来する。

<sup>コロシム</sup>闘技場は、大歓声と言ってもいいほどの声に包まれていた。

そして、それに負けぬほど大きな声に魔法的に増幅された<sup>アナウンス</sup>案内が、<sup>コロシム</sup>闘技場に響き渡る。

『只今の勝負　勝者、アリーナ・フォン・サントハイム選手！』

それを合図に、<sup>リ</sup><sup>ン</sup><sup>グ</sup>戦闘台上の少女　アリーナが、自らの勝利を誇るかの如く、天を仰ぎ、  
右拳をカ一杯に空に差し上げた！

観客席が、一気に弾けた！

先ほどとは比べ物にならぬ、割れんばかりの圧倒的な拍手と歓声！

<sup>コロシム</sup>闘技場に集った人々は皆、これだけ素晴らしい勝負を見せてくれた二人を、賞賛し、祝福していた。

そして、その激闘を制したアリーナに、惜しめない賛辞を贈っていたのである。

「アリーナ姫様」  
両手を胸の前で組んだまま、涙を流すモニカ。  
彼女に向かって、アリーナはにっこり微笑むと

その体が、ぐらっ、と揺れ  
糸の切れた操り人形のように、両膝をつき その場に崩れ落ちた！

「！」  
「姫様っ！」  
「いかんっ！」

モニカの息を呑む音、クリフトとブライの叫び そして、観客席から漏れるどよめきを遠くに聞きながら、アリーナの意識は、闇に沈んでいった。

(つづく)

---

< 次回予告 >

それは、2日前のことであった。  
エンドール城の王室での、短く、そして激しいやりとり  
アリーナの物語は、そこから始まる。

「不屈の王女殿下(ハイネス)」第1話 「発端」

王家の人間として、同じ女の子として 私は貴方を、助けたい。

---